

病初期臨床所見による冠動脈病変 発生予知の検討 — 第2報 —

保崎純郎，泉田直巳（東京医科歯科大学小児科）
渡部誠一，清原鋼二（土浦協同病院小児科）

はじめに：

我々は病初期臨床症状による冠動脈病変発生予知につき，前回に引き続き検討した。

対 象：

東京医科歯科大学小児科および土浦協同病院小児科に入院した58例の川崎病患児である。いずれも7病日までに入院して，種々の検査をうけ，さらに8病日から10病日に再度検査された例である。断層心エコー図検査は週1回以上定期的に検査した。断層心エコー図検査所見で1回も異常のみられなかった45例を冠動脈病変なしとした（以下，正常群と略す）。一方，冠動脈瘤が発症2～3カ月以後までみられた13例を冠動脈病変ありとした（以下，異常群と略す）。なお，すべてアスピリンで治療した症例である。

方 法：

すでに我々が研究した結果を参考に，性，発症時年齢，有熱期間，最低Hb値，最高白血球数，最高血小板数，最高赤沈値，最低血清アルブミン値の8項目について両群を比較検討した。さらに，7病日と8～10病日でのそれぞれの検査値の変化についても比較検討した。

成 績：

1) まず，性と発症時年齢についての両群の比較では，異常群で発症時年齢が有意に低かった。次に，検査所見についての両群の比較では，7病日迄では最低血清アルブミン値，8～9病日迄では最低血清アルブミン値と有熱期間，10病日迄では最低血清アルブミン値，有熱期間そして最低Hb値で有意な差を認めた。また，7病日と8～10病日でのそれぞれの検査値の変化についての検討では，異常群でHb値が有意に低下すること，さらに血小板の増加が有意に少ないとの結果が得られた。

2) 以上の項目の内，7病日迄と8～10病日迄で，有意差を認めた項目について基準値を表1，表2のごとく設定した。次に異常群と正常群の各症例がその内の何項目に該当するかを調べた。基準値としては正常群の平均値から異常群の平均値に向って1標準偏差程成離れた値れた値を用いた。

表 1

7 病日までの川崎病冠動脈異常判定のための項目

- ① 発症時年齢が 1 歳未満
- ② 最低アルブミン値が 3.8 g/dl 以下

以上の表 1 の項目に該当する例数は下記のごとくである。

| | 正 常 群 | 異 常 群 | 異常者の頻度 |
|---------|-------|-------|------------|
| 2 項目該当例 | 3 例 | 5 例 | 5/8 (63%) |
| 1 項目該当例 | 16 例 | 4 例 | 4/20 (20%) |
| 非 該 当 例 | 26 例 | 4 例 | 4/30 (13%) |

表 2

10 病日までの川崎病冠動脈異常判定のための項目

- ① 発症時年齢が 1 歳未満
- ② 有熱期間が 10 日以上
- ③ 最低アルブミン値が 3.5 g/dl 以下
- ④ 最低 Hb 値が 10.0 g/dl 以下
- ⑤ Hb 値の 1.5 g/dl 以上の低下 (7 病日と 8~10 病日間で)
- ⑥ 血小板の 5 万以下の増加 (7 病日と 8~10 病日間で)

以上の表 2 の項目に該当する例数は下記のごとくである。

| | 正 常 群 | 異 常 群 | 異常者の頻度 |
|---------|-------|-------|------------|
| 6 項目該当例 | 0 例 | 0 例 | |
| 5 項目該当例 | 0 例 | 4 例 | 4/4 (100%) |
| 4 項目該当例 | 0 例 | 2 例 | 2/2 (100%) |
| 3 項目該当例 | 5 例 | 6 例 | 6/11 (55%) |
| 2 項目該当例 | 13 例 | 1 例 | 1/14 (7%) |
| 1 項目該当例 | 16 例 | 0 例 | 0/16 (0%) |
| 非 該 当 例 | 11 例 | 0 例 | 0/11 (0%) |

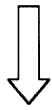
考 案：

断層心エコー図検査以外の一般的検査所見，あるいは臨床症状から川崎病の冠動脈病変発生を早期に予知できれば，①患児の経過観察上有用な情報となる，②施設によってはより高度の医療機関への早期転送が可能となる，③ガンマグロブリン製剤投与の参考基準になる可能性がある，などの利点がある。

今回，我々が検討した項目は性，発症時年齢，有熱期間，最低Hb値，最高白血球数，最高血小板数，最高赤沈値，最低血清アルブミン値の8項目である。10病日以内で正常群と異常群とで有意差がみられた項目は発症時年齢，有熱期間，最低Hb値，最高血小板数，最低血清アルブミン値であり，14病日以内の検討で有意の差がみられなかった血小板に興味ある結果が得られた。すなわち，7病日から10病日までの病初期に血小板数の増加が軽度であったり，あるいは血小板数が減少する例では，冠動脈異常発生の頻度が高いという結果が得られた。今後さらに検討をする予定である。また，CRPの陽性程度も参考所見となる静岡県立こども病院の中野博之博士の報告があるので，その点についてもわれわれは検討する予定である。

参考文献

泉田直己：臨床所見による川崎病冠動脈瘤発生予知の試み，日児誌．，90：1355，1986．



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



成績:

1)まず,性と発症時年齢についての両群の比較では,異常群で発症時年齢が有意に低かった。次に,検査所見についての両群の比較では,7 病日迄では最低血清アルブミン値,8~9 病日迄では最低血清アルブミン値と有熱期間,10 病日迄では最低血清アルブミン値,有熱期間そして最低 Hb 値で有意な差を認めた。また,7 病日と 8~10 病日でのそれぞれの検査値の変化についての検討では,異常群で Hb 値が有意に低下すること,さらに血小板の増加が有意に少ないとの結果が得られた。

2)以上の項目の内,7 病日迄と 8~10 病日迄で,有意差を認めた項目について基準値を表 1,表 2 のごとく設定した。次に異常群と正常群の各症例がその内の何項目に該当するかを調べた。基準値としては正常群の平均値から異常群の平均値に向って 1 標準偏差程成離れた値れた値を用いた。